



お・しえの花束

晴

秋彼岸号

「雲 晴」第二十四号

平成二十九年九月一日発行

貞林院瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五-四六-五
電話(03)3627-3411 FAX(03)5699-5915



裏をみせ表をみせて散る紅葉

“裏をみせ表をみせて散る紅葉”^{もみじ}という句があります。

秋も深まり、風もないのにヒラヒラと散つていく落葉の風情が浮かびます。また、秋が過ぎて、もうすぐ厳しい冬がやってくるのを示した句ともれましよう。この句は、單なる俳句というよりも、人間の生きる姿を句に託したものとして、味わい深いものがあります。

よく「人間は棺に入つてはじめて価値が定まる」などといいます。つまり、いよいよ死ぬときを迎えると、これまで行なつてきたことの洗いざらいが見えてきて、その人がどのくらいの人であったかわかる、というわけですね。

もうここまでくれば、オレさまにかなうものはあるはずがないと思い、雲のなかに立つている五本の柱に、ここまできた証拠の印をつけてお釈迦さまのもとへ引き返します。そうして自慢げに報告をしながら、お釈迦さまの手を何げなく見ると、指にその印がついていた、というわけです。

「これは、仏さまは何でもかんでもお見通し」ということです。いつでもどこでも見てござる、限りもない大きな愛に私たちは守られているのです。

慈悲の光の当たらない人も場所もありません。だから仏さまにすべてをおあずけして安心して生きていきましょう。何も怖れることのない、心安らかな世界。

それに気づくように教えてくれるのが、“裏をみせ表をみせて散る紅葉”よくよく味わってください。

それが“裏をみせ表をみせて散る紅葉”です。“西遊記”をご存じですか。あのなかで孫悟空が、お釈迦さまと飛び比べをします。どちらが遠くまで飛べるか競争しようというわけです。うぬぼれ屋の悟空はキント雲に乗つて力いっぱい空中を駆けました。

お盆月をむかえ、家に集まつたり、ても食べさせることができません。お墓参りに行かれたことだと思います。

お盆は、ご先祖様が家に帰つてきてくれる期間。孟蘭盆経によると、お釈迦様の弟子で神通力第一の目連様が、

お盆月をむかえ、家に集まつたり、ても食べさせることができません。

お釈迦様にお尋ねになり、七月十五日は修行僧が自らの修行のありようを

反省し懺悔する日なので、僧に施し供養してもらえば、母のみならず先祖も

●孟蘭盆を過ごして●

回向院副住職 本多 将 敏

先に亡くなつた母はどう過ごしているか心配で神通力で見たところ、痩せ衰え、餓鬼道で苦しむ母を見つけました。たというお話しです。

救われると教えて頂きます。目連様は言われる通り供養を施し、皆が救われます。ですが、すべて炎に変わり、どうし

この孟蘭盆経を少し曲解すれば、餓鬼道に落ち、苦しんでいたのは、生き

ている私たち自身ではないかとも考えられます。私たちは常に「あれば欲しい、あの人するい、自分さえよければ」などと我欲を張つてしまつたり、張つていてこと自体に気付かないこともあります。が、我欲でいっぱいの心は、苦しみを絶え間なく生み続けます。お盆の供養・孟蘭盆経での僧への施しは、こうした我欲を捨てるための修行であるでしよう。お盆とは、先祖供養を通じ、自らを見つめ直すという、当たり前のことに気づかされ、教えられる大事な期間なのです。

目指す世界

いよいよ秋のお彼岸です。さて、「彼岸」とはいつたいどういう意味でありましょうか。それは我々凡夫がを目指すべき悟りの世界のことです。

今、世の中では「天国」という言葉が氾濫しています。仏式でお葬儀をしているにも拘わらず、老いも若きも人の死に対して「○○さん、どうぞ天国で安らかに・・・」などと

ただ多くては金に替えるに限る、長範は盗んだ馬を前に、「ハテ、どうしたものか」頭を抱えておつた。

その長範に、耳寄りな噂が流れてきた。なんでも、尾張から三河へ

ところが、こう派手にやつておつては、盗まれた方では、八方手をつくして探すだろうから、盗んだ馬を馬市に連れていくても、たちまちバレてしまうことはハッキリしておる。長範の悩みはそのことじや。ゾロとお地蔵さまの前へ引っ張つていったそな。

「お地蔵さま、どうかお助けくだされ。泥棒ぶりに、金持ちはみんな、震え上がつたそうな。特に金持ちが困つたのは、金にあかせて買い求めた名馬を盗まれることだつたと。

むかし、尾張の国に、熊坂長範といふ大泥棒がおつたそう。根城は誰にもわからなかつたそうだが、尾張の国はもちろんのこと、美濃の国にもでかけては、金持ちの家から金品を盗みだし、その神出鬼没の天晴れな泥棒ぶりに、金持ちはみんな、震え上がつた。特に金持ちが困つたのは、金にあかせて買い求めた名馬を盗まれることだつたと。

民話の小箱（愛知県）



毛替え地蔵 ●はてなの泥棒

毛替え地蔵（はてなの泥棒）

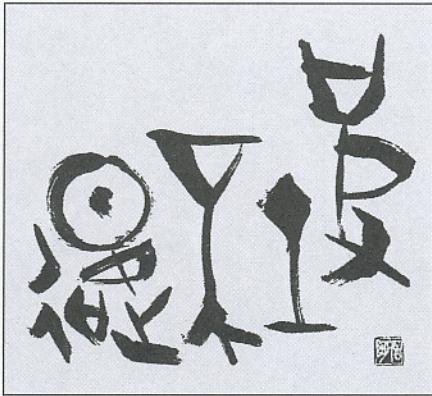
一口法話



言ふ人が多くなっています。その原因はテレビや新聞などマスコミが、死後に向かう世界＝「天国」という間違つた表現を一様に使つてゐるからです。キリスト教信者なら天国が目指すべき理想の世界であるでしょうが、仏教で目指すべき世界は「淨土」、とりわけ我が浄土宗では「西方極楽淨土」です。その事をはつきりと認識していないと教養としても恥ずかしいことだと思います。



「彼土不退」 故林 錦洞書
貞林院瑞正寺 住職 林 清方



金文（中国の古代文字）で書く日本独特の仏教行事でもあります。この語句は「ひどふたい」と読みます。「彼土」とは彼岸と同じ意味で西方浄土のことです。

お彼岸は春と秋の年に二回あります。お中日は昼と夜の長さが同じであるため、太陽が真西に沈む日もあります。真西に沈む夕日の彼方に西方浄土があり、そこに向かってお念佛を称えて亡き先祖を偲び、いざれは私たちは皆すべてが阿鞞跋致となり

ますようにと願い、手を合わせてお中日を挟んでの前後三日間、決して戻り退くことはないといふ意味です。淨土宗根本經典の一つである「阿弥陀経」の中に、「極樂国土」衆生生者 皆是阿鞞跋致」という句があります。これは「極樂淨土で生きる人た

これは金持ちから盗んだ馬、その金持ちは、みんなひどいやり方でもうけたヤツばかりでございます。売ったお金は、必ず困つた人に分けますので……。

長範は、一心不乱に祈つたそうな。「困つた人……」の一言がお地蔵さまのお気に召したのじやろうか、みると見る馬の毛色が変わつたのじや。

長いことお祈りして目を開いた長範は、あまりのことに、思わず目をゴシゴシこすつた。なんと白毛はあし毛に、黒毛は栗毛に……と、みごとに馬の毛色が変わつておるのじや。



その後、長範は、お地蔵さまの近くに馬小屋を作り安心して馬を盗んだそうながら、そんな長範のことを、馬泥棒などと、お上に訴えるヤツは、誰もおらんかつたと。

おしまい

総本山知恩院布教師会ホームページより

ます」という意味で「阿鞞跋致」とは不退転という二度と後退することのない境地へ至つた菩薩のことを意味しています。つまり「彼土不退」のことを表しています。

お中日を挟んでの前後三日間、計一週間をお彼岸といい、仏道に励む期間とされています。せめてこの一週間だけでも自分のできる事の何か一つを不退転の気持ちでやり通してみてはどうでしょうか。

「ありがとうございます。」「喜んだ長範、お地蔵さまに、ながながとお礼のお詣りをすませると、胸を張つて馬市へ出かけていつたそなにしろ、金持ちから盗んだ名馬ばかりじや、良い値で売れたそな。

長範は、その金をお地蔵さまの約束通り、困つたものの家の戸口に、そつと置いて歩いたそな。

現在、「天国」という言葉は單に「死んだ」という意味だけで使われているのかも知れません。しかし、生前どんな行いをしても總ての人々が「死ねばみんなパラダイスに行けるのだ」と勘違いしたなら、煩惱の命ずるままに生きて、後に地獄の苦しみを受ける事になりかねません。

我々凡夫が目指すべき世界はあくまでも「極樂淨土」であり、そこに行くための手だてがお念佛であります。どうぞ毎日お念佛を申してください。そのことによつて間違いなく、彼岸=極樂淨土に行きつくことができるのです。

秋の彼岸法要ご案内

秋の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

九月二十三日(土) 正午より

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申しあげください。

回向料 (お布施) 志納
塔婆料 三千円

「元海軍特攻隊員の講演」

六月二十四日、同志社女子大学内の栄光館にて海軍第十四期飛行専修予備学生出身で、裏千家前家元である千玄室さんの講演がありました。

先代住職林錦洞も予備学生出身であり、前家元とは同期の桜として生前親しくお付き合いしておりました。

この企画は「学徒から学生へ～つなぐべき記憶のバトン～」と題して同志社大学の学生で組織されたデルフォイという会により主催されました。



(左より横家さん・千玄室前家元)



「学生のお点前をご覧になる前家元」

ムなどを見ていくうちに、そのころの自分と同じような年代の隊員たちがどのような思いで出撃したのかなどに興味を持ち、当時を知る方々に話を聞き、それらを是非多くの学生にも伝えたいという思いからこのような企画をされたとのことでした。

横家さんは昨年九月に毎年高野山で行われている海軍十四期慰靈祭で初めてお会いし、それがご縁で同年十一月に当山の慰靈祭にもご参加いただきました。その際に今回の講演の企画を聞き、喜んで賛同し、協力を申し出たものです。



これから日本を背負う若者たちがこのお言葉を胸に、戦没者への敬意と平和への誓いの念を持ち続けてくれることを願うばかりです。